書評

Simon Kuznets: *Economic Change*—

Selected Essays in Business Cycles, National Income, and Economic Growth, N. Y., 1953.

松坂兵三郎

景氣變動とは、一般的には、産業活動の變化を反映する好景氣・不景氣の過程を總括したものである。このような景氣の變動がいかなる原因によりいかに時間的に繼起していくかを體系的に説明したものは、景氣變動を記述しかつ分析した文獻と共に、枚舉にいとまないであろう。しかし、「セイ法則」を金科玉條とする古典派經濟學者にあっては、均衡がいかにあらわれ、いかに維持されるかを分析することこそ主たる關心の的であり、いわゆる景氣循環論は前面に押し出されていない。一般的ならざる過剰生産や突發的かつ部分的な恐慌を斷片的に取扱つたものを發見することができて、それは必ずしも體系的な理論の各に値しない。それにつけても、激しい恐慌の襲來や深刻な不況を目の前にして、人々の關心がようやくしてそれに集中されてきたのは事實であろう。マルサス、シスモンディ、ロードベ

ルタス、マクロード、ジェヴォンス、マルクス等十九世紀の經濟學者が景氣循環過程やその局面を説明する理論の建設にある示唆を與えたことは認めるとしても、景氣循環の全局面が完全に近いといわれる程説明されるに至ったのは、ようやく二十世紀に入ってからである。一九一三年にW・C・ミッチェルが景氣循環の問題をその十分な經驗的範圍にまで擴げるに及んで經濟的動的な過程の説明に大きな一石が投ぜられたし、一九一四年にシユムペーターが動態經濟學の試論を世に問うに至って靜態經濟理論に對する景氣變動理論の論理的關係が新しい光の下に定式化されることになった。しかし、景氣變動の本質が投資從って資本の攪亂的な作用のなかに求められる、第二次的な助長要因によって更にその動きが強められるという點が認識される以上、補助的な要因の結果する現象にのみ目を奪われるのは必ずしも理論の發展に資するゆえんのものではない。眞の理論にして打立てられないならば、正しい景氣の診斷も權威ある處方箋も書きえない筈であろう。それには、われわれはもう一度景氣變動理論のふり出しに戻って、その方法論的基礎に反省を加えると共に、動態經濟理論のなかに於ける景氣變動理論の正しい位置を發見しなければならない。

S・クツネッツは人も知る統計的研究の大家である。變轉きわまりない現實を前にして、われわれは彼の歴史的な一般化がいかに景氣變動理論の體系に開花しているかをみてみよう。問題は決して新しくはない。しかし、その重要性は決して失われて

いないのである。

一 均衡経済學と景氣循環論

今日、「景氣變動」とは一經濟社會全體の「ハイヴィア」について、その動的・循環的な特性をあらわすものとして用いられている。言葉の廣い意味で資本主義經濟體制を前提とする限り、かかる變化は物價・利潤・賃金・生産量・雇用量等々の動きによって彩られているので、またこれら重要な經濟諸量の變動とすることができらるであらう。

もちろん、このような意味にとられた變動が、言葉の嚴密な意味で、*cyclical* といつてよいかどうかは少くとも議論の餘地がある。放逸な變動こそこの動きを特色づけるものであるとする者ならば、經濟過程をそれぞれ代表している經濟諸量の不規則的な變動を強調するであらう。ここでは *irregularity* というタームが好んで用いられ、このような動きがやがてその頂點に達して恐慌にまで爆發する。しかし、一般化を好み、具體的な事象を一つの型にはめこんで、景氣變動のうちにはただ變動とといっただけではつくされないような規則性を發見しようとする者ならば、この規則性（周期性）に *accent* をつけて *business cycle* あるいは *oscillation* という用語を慣用するであらう。しかし、このような景氣の循環的諸局面も二十世紀になるまでは殆んど眞實の經濟現象とみられなかつた。何故なれば、傳統的經濟理論の任務は稀少性と行動の合理性を大前提とし

て、基本的な經濟過程の一般法則を記述し、經濟體制内部における諸要素間の一般的な關係を打ち立てるにあつたから、そこに打出された經濟の構圖は諸要素間の相互依存關係とその永續性であつた。いわゆる均衡概念を中心とする經濟學の體系これである。均衡概念が封鎖的な相互依存の體制と論理的に結びついているとするならば、當然、外部の影響力からの獨立性や經濟的な諸要素の函數關係を通じて始めて均衡狀態の永續性が保證される筈である。このようにいわば靜態體制の下で、運動の理論が展開されるというならば、變差法 (*The method of variation*) による以外にないであらう。これによって運動は説明されても、既に外的諸力からの獨立性は破られねばならない。特に一旦均衡狀態から離れた動きが再び以前の位置に復歸するのを助ける力もまた經濟外的なショックに求められるというならば、進んで經濟的な變動の繼起を説明する原理をも全く缺くことになるし、延いては經濟現象としての攪亂狀態の規則性も見失われることになる。従つて、景氣の循環的變動が經濟理論の一般的な敘述から導き出されて、景氣循環論が一般經濟理論の缺くべからざる一部となるためには、變動の問題が傳統的な經濟理論の體系に向ける知的挑戰を通じて始めて可能であるといわねばならない。

知的挑戰は先ず極端に走るのが常道である。景氣循環論もとよりその例外ではありえない。とはいへ、變動の突發的な性格や一時性がいくら強調されても、このような攪亂現象の繼起

が明らかにされない以上、その説明は少しも傳統的な經濟理論への挑戦ではありえなかつた。變動が景氣の恐慌と考えられる限り、經濟理論で假定された事態の成行にとって依然一つの例外たるを失わなかつたから、少くとも理論的な重要問題を形成しなかつた。このような見方が、變動そのものの特殊性や當時支配的な理論體系の性格から一層強められたことは事實である。古典派經濟學者達が彼等の理論體系のなかで何故恐慌の問題にこれ程僅かな地位しか認めなかつたかという理由の一端は、一般的な過剰生産の不可能を説いたかのJ・B・セイもさることながら、一七六三年から一八四七年に至る期間について、激しい攪亂の多くが戦争とか技術的革新・收穫・投機熱のような經濟外的要因と結びつけられたことにある。もちろん、變動の永續性や繼起を説明するものとして、經濟的な要素にだけその榮譽を與えるわけにはいかぬかも知れない。學說史的には、W・S・ジェボンスの例に見られる如く、恐慌を頂點とする景氣變動の律動的な性格が浮彫にされても、非經濟的な原因から生れ出た規則的な循環をあとづけることに留まっている限り、理論體系の不十分さというよりはむしろ歸納的研究の不完全さの故に、依然對象の經濟性は背後にかくされている。しかし後にクレメン・ジュグラーによりその問題の經驗的研究が廣く押し進められるに至って、景氣變動を經濟外的原因に求めて、嚴密に周期的な回轉と考えるのは誤つた單純化であるということが分つた。すなわち、景氣循環は不規則なもので、天候のよ

うな外的要因はその關係とは縁が薄いし、またそれらが經濟の現實にあらわれた場合には、振幅のなかに含まれたものもちらんのこと、多くの經濟的な要因から説明がつくというのである。ただこのような循環がたまかながら規則性をもって繼起するといえるためには、この上に動きの統計的・實證的研究や歴史的な一般化が重みを以て加わればよい。事實、第一次大戰前には景氣循環の經驗的研究に一層の拍車がかげられ、W・C・ミッチェルの「景氣循環論」初版で劃期的なところまで到達した。他方、先ず古典派によって展開され、それから主として限界效用學派によって再建され、更に數理學派によって醇化された經濟學の均衡圖式に對する批判も増えて、景氣循環論の挑戦に應じて自らの門戸を開いた。動態經濟學の彫琢これである。

もともと傳統的な經濟理論の前提たる稀少性と合理性は個人のビヘイヴィアを説明する統一原理には不可欠なもので、社會現象はいわば個人の活動の單純算術總和としてのみ意味をもっていた。ところで、動態經濟學の主たる任務は歴史的時間にまたがる經濟現象の變化を研究するにある。個々人の活動の變化が社會現象の時間的な動きのなかで重要な役割を果たしている場合は別として、動態經濟學は總體的な社會現象を取扱つるもので、個人の活動水準にまで下りてこない。従つて、この點に達すると景氣循環論の挑戦は既に講和への道を發見するであろう。というのは景氣循環論が統計的・實證的研究の力をかりて

その歴史的一般化に劃期的な進歩をみせている間に、動學化への動きが理論的装置すなわち乗數理論・加速度原理・倍率原理 (Magnification principle) をそれら lag or lead analysis 等の分析装置を彫琢して經濟理論の武器庫に納めたからであり、ここに至って始めて景氣循環は眞實の經濟現象として重要になるし、經濟學の基本原理の助けをかりて説明されるようになったからである。

二 經濟成長と景氣循環

次にわれわれは全編十一の論文を代表する Economic Cycle というタイトルに目を向けよう。景氣循環は短期における經濟活動の全體的な表現であるといわれる。これが靜態的循環のシエーマに乗ってこない動態的な様相において把握される以上、經濟成長の動態過程と根本的に結びつけられねばならないであろう。われわれが景氣循環を説く過去の勞作をひもどいても、何にもまして長期的な發展と緊密に關連づけられていたものであった。これには次の二つの理由が考えられる。まず第一に、循環的變動が投資過程や生産力の成長と結びついていたこと。第二に、産業革命以後歴史的なブームの時期が多くの場合、重要な技術的革新と明らかに關係していたからである。従って、短期的な景氣循環の過程はこのような發展の上部限界と下部限界との間に横たわるある與えられたブーンを運動の場として與えられることになる。クズネットにあっては、このような

發展的成长が短期的な循環の時間積分においてとらえられていると共に、これこそ重要であるが、更に循環の繼起を規定し、その規則性を保證するに必要な條件として把握されている。従って、彼の Economic Change はこのような發展の趨勢と循環の止揚された姿においてとらえられるのを最も適當としよる。

循環的變動と經濟成長の關係をとりあげるに當って、われわれはまずシユムペーターの名を逸することができない。彼にあっては、好況や不況が資本主義社會における經濟進歩のとり形態として理解されており、景氣循環は單に經濟進歩の一つの副産物にすぎないという景氣循環理論が唱導されているからである。彼にあって、主要な革新が具體化するためには、革新のために好都合な發展的環境が與えられねばならない。投資景氣を特色とする好況は英雄的な企業者の導入した革新が次ぎ次ぎにとり入れられ、次いでこのような革新が十分に開拓されつくした時に經濟は再び不景氣に後戻りする。そして、この不景氣は新しいアイディアの蓄積が革新的な投資を新たに行わせるに恰好な環境を生み出すまで續くのである。しかし、シユムペーター理論の難點は記述的ではあるが分析的でないという點に歸著するであろう。すなわち、シユムペーター理論の根幹をなす革新的投資の束は、乗數理論や加速度原理などの助けを借りることなしには回歸的循環の發生を満足に説明する必要かつ十分な條件となりえないからである。創造的な企業者やその模倣者

あるいは技術的革新の概念に頼ることなしにはサイクルを説明しえないから、彼のストーリーは一つのモデルにこしらえあげることができない。分析的といわれるためには、循環をそれだけで十分に説明できるような要因をこのモデルのなかに組入れることが必要である。この意味で、乗数や加速度原理を導入することによって景気循環の美わしい軌跡を描いたものとして、例えばヒックス「景気循環論」(一九五〇年)をあげることができらるであろう。

もともと、景気循環は存続期間 (duration) と振幅 (amplitude) を二つの特性としてもっている。前者は景気の頂上 (谷) から次の頂上 (谷) までに経過する時間を意味し、後者は擴張 (收縮) の時期から收縮 (擴張) の時期に至る運動率の下落 (上昇) を意味する。従って、経済成長が景気の循環的變動に及ぼす影響は發展的動態がこのような存続期間ないしは周期と振幅に及ぼす効果をみればよいことになる。ミッチェルは景気循環を一國民經濟の總體的な經濟活動における循環的な動きと特色づけたし、また企業經濟の支配する經濟體制に特有な現象とみたが、ここでの問題も結局一國民經濟における種々なる産業部門の相対的な重要度をシフトさせるものとして經濟成長がいかなる意味をもっていかを尋ねることに歸する。極端にいえば、種々なる産業部門にはそれぞれの活動に應じた無数の循環が考えられようが、そこで支配的な産業部門が循環の全體としての周期と振幅にある大きな影響力をもっていることは事實

で、このような産業部門のウェイトの變化が技術革新や人口の變動・國際的な關係などを通じて現われる。

三 クズネットの景気循環モデル(1)

——時間係數不均等の理論

われわれはクズネットの景気循環モデルを明らかにする段階に到達した。まず彼の第(1)モデルから説こう。ここでは時間要素の導入が永續的な均衡の可能性を完全に否定すると共に、タイムラグと周期という二重の面で時間係數 (time coefficient) の著しい多様性を表わす現實の姿が浮彫にされる。時間係數の多様性ないしは不均等とは種々なる市場すなわち企業活動のいろいろな分野における經濟的反作用の時差を意味する。時間係數の不均等はランダムなバイアスをもった攪亂を累積させ、さらに經濟變動の常態として、かなりの繼續性をもつ振動を出現させる。このような亂變動はかなりの度數をもつて正常線の下下に分布するから、これを時間的に積みあげていったり、その移動平均を求めても直線上に乗るとは限らず、もし影響力の比較的大きな亂變動が生じた時には、その波及作用が一定の時間にわたって振動を生ぜしめるであろう。

クズネットによれば、經濟的反作用が時間的に齟齬を生ずる、すなわち時差をもつということを認容するのは、いわゆる時の遅れや進み (lag or lead) を經濟理論の體系に導入すること、また反應の量的な不比例性 (disproportionality) をその分析裝

置として飾ることになろう。そこにおいては、經濟諸量の嚴密な相互依存關係が排除され、積極的に亂變動の累積過程が展開されることになるし、循環的振動の幅を擴大したり長びかせるのに役立つようになるというのである。しかも彼らにあっては、亂變動の繼續的な流れを誘發し、方向づけるものとして技術的革新や人口の變化とか、さらにはこのような基本的諸條件をしてよくその處を得せしめるような蓄積資本の作用が注目されており、ここに至ってそれまで多少とも非經濟的な變動の過程としてつかまえるられるかも知れない亂變動が經濟生活の道ゆきに影響するようになってくる。例えば技術進歩は低コストという經濟的に重要な作用をもっているし、人口要因の變化（これは必ずしもランドムなものとはいえないが）は需要の増加や勞働供給の増加となつて、景氣循環との緊密な關係が説かれることになろう。

四 クズネッツの景氣循環モデル(2)

— 加速度原理、倍率原理

景氣循環の主要な原因が產出量の變化の投資に與える影響にみられるとなす主張は、今日別に目新しいことではない。それはJ・M・クラークの名と共に衆知の「加速度原理」以外の何ものでもない。クラークにあっては、投資財需要が完成生産物需要の絶対量よりもむしろその變化率と共に動くという關係がまず注目された。その結果、投資の變動がより廣い振幅をもつ

て完成生産財需要の變化に先行するし、また消費財の振動と比較した場合に、資本財の循環はそれよりもタイムリングが早くしかも振幅が大きいという形で景氣循環が把握されたから、産出高の初期における變化率を與えられたものとする限り、最終生産財に對する需要とそれから誘發される資本財需要との間の相互作用が景氣循環の有效な説明を與えるものと理解された。しかしながら、投資従つて資本財のなかには、一は完全に消耗的なものから他は永久的資源ともみられるものまで、その耐用年数を種々異にするいわゆる中間生産手段があるであろう。この意味から資本・産出高比率も決して不變ではありえない。この比率の可變性が強調されると、いままでよりも資本集約的（勞働節約的）な生産が資本節約的（勞働集約的）な生産が發展して、資本財に對する附加的需要にかなりの變化を及ぼすであろう。と同時に、この比率にして小となるならば、取換需要も小となり、かつ完成生産財を生み出すための勞働力の割合が多くなる。

また特に固定資本の誘發投資を考へる場合には、減價償却要素に多大の注意を拂ふ必要があるから、いわゆる新投資需要（資本財の附加的單位に對する需要）と置換投資需要との區別もかなり重大となるべきであらうし、粗投資と純投資との區別も必要とならう。とりわけ、この理由から固定資本に對する投資と流動資本（經營資本）に對する投資とは嚴密に區別する必要がある。投資需要はその目的から少くとも取換目的のための

需要と擴張目的のための需要と二つに分けられるが、前者は専ら完成生産財の絶対量と比例するものとみられるし、後者はその変化率に關係づけられる。とはいえ、資本・産出高比率が一年以上だと置換投資需要は産出高の絶対水準とは直接に關係づけられないで、主として資本財の耐用年數や過去における裝備の狀況に依存することになるし、この裝備資本の存在高が新投資需要を規定する重要な基準となることはいうまでもない。クズネツにおける時間要素の導入は、資本・産出高比率の一定というクラークの假説の修正を餘儀なくさせた。そして可變的な比率の想定は、有效需要との關係で別に過剩投資の問題に接近させる。もし過剩投資の状態にあって、餘分な能力を保持するならば、産出高需要の變化率から新投資需要への誘因が働いても、この結果はかなり割引きさるべきだろう。

クラークの提起した加速度原理を受けついで、クズネツは以上の如く景氣循環の原因を完成生産財需要の變化が資本財需要に加速度的な・倍率的な變化を與える點に求めたが、この際クラークによって單純化された假説のいくつかを順次解放してより現實的な理解に數歩の前進を示した。總して、投資の性質いかによって投資や産出高の變動から跡づけられる循環の周期と振幅に大きな相違のあることを發見したのがそれである。次いで循環的繼起の必然性が説かれねばならないであろう。いま完成生産財需要のプラスの變化が豫め與えられるならば、資本・産出高比率の大きいかによって循環徑路は上昇の動き

を示すであろう。この上昇運動の限界を劃するものは與えられた資本財の生産能力である。この上昇限界線を更に上方にシフトさせて上昇運動の一層の繼續を可能にするものは、いうまでもなく技術革新という長期的な成長要因である。もしこれも與えられたものとすれば、この點で當然下降への運動に轉換するであろう。下方限界線を規定するものは、取換需要という完成生産財需要の變化率とは直接關係のない置換投資需要の存在である。accelerationやlag functionが妥當するのは、完成財需要の第一次循環の上昇局面まで、それを超えてはその妥當性が疑わしいとされるから(七三頁)、下方限界線から上向への轉換にはかなりの置換投資の量を必要としよう。この場合、置換投資需要が循環的繼起を説明する必要條件となる。

われわれはクズネツ景氣循環モデルの概要を示し終った。ここでの論述とヒックス「景氣循環論」とを改めて對比してみよ。ヒックス・モデルに對するクズネツの先行者としての地位が明らかとなるであろう。ただし彼の倍率原理は誘發投資に關するもので、ケインズの乘數理論とはその性質を異にするものであるから、ヒックスの彫琢した「超乘數」の如き便利な分析裝置を缺いている。従って、循環の始發性については置換投資需要の存在以外説明の手掛りをもたないといわねばならない。しかし、これをも獨立投資とみるかどうかは嚴密な考證と統計的實證を必要とするであろう。